

イギリス・ルネサンス期の翻訳

——最近の研究から——

正岡 和恵

イギリス・ルネサンス期の翻訳に関する研究は、長く不毛をかこっていた。しかしながら、二一世紀はじめの一〇年のあいだに、翻訳作品目録のデータベース化や翻訳史の出版など記念碑的なプロジェクトが進行し、いまや翻訳研究をめぐって新たなルネサンスが生じつつある。本稿では、それらの規範的な業績をいくつか紹介するとともに、初期の研究史を振り返ってみたい。

まずはじめに、翻訳史のランドマーク的著作について触れる。

The Oxford History of Literary Translation in English (以下OHLTEと略す) は、中世から二〇〇〇年までの英語圏における翻訳史を叙述した初めての試みであり、イギリスとアメリカの学者たちの協力の賜物である。五巻に分かれ、二〇世紀を扱う第五巻を除いて、二〇〇五年から二〇一一年にかけて四巻が刊行された。いずれの巻も構成はほぼ同じである。まず、翻訳をそれぞれの時代の文化的・社会的な文脈に位置づけ概観する章から始まり、翻訳理論、翻訳者、翻訳作品(ジャンル別)などの章を経て、翻訳者の簡単な伝記によって締めくくられる。翻訳がいかに産出され、実践され、受容されたかという文脈化に続いて、誰が何をという個々の翻訳者や作品に関する論述があり、目次を一見しただけでも、翻訳が英語にまつわる諸文脈のなかでいかに作用しているかを明らかにすることがこの企画の関心事であるとわかる。監修者の序文によれば、OHLTEの全体的な意図は二つある。一つは「英語圏世界における翻訳の技法ないしは翻訳術の発展を批判的かつ歴史的に概観すること」(vii) であり、もう一つは「文学的な翻訳が土着の伝統をいかにゆるがし、豊かにし、変容させたかを示す」(vii) ことである。翻訳がほぼすべてのテキスト産出に関わり、複雑な多言語状況のなかできわめて政治的な意味合いをもっていた中世、翻訳がイングランドの言語と国家の形成に決定的な役割を果たした初期近代、イギリス文学という概念が発展しつつある一八世紀、世界文学という概念が生じた一九世紀——翻訳の歴史的変遷の姿が大きな川のうねりのように展開するなかで、何よりも強く伝わ

てくるのは、翻訳が文学文化の形成に歴史をつうじていかに広範な影響力を揮ったかということである。翻訳は文化や歴史を理解するうえでの鍵となる——これは、OHLTEが、以下に言及する*Renaissance Cultural Crossroads* (以下RCCと略す) やMHRAの編者たちと共有している信念であり研究の基本的な前提でもある。一つものたりない点を挙げるとすれば、歴史化するというスタンスと相容れないのか、従来の翻訳研究でしばしば行われてきたような、原典と翻訳を詳細なテキスト分析によって比較するといった試みがほとんど見られないことである。そこには、二一世紀初頭に生じた翻訳研究の視座の転換が関わっている。いまや翻訳作品は、原典との垂直的な関係性において、すなわち、二次的な派生物としての忠実の度合いにおいて論じられるのではなく、独立して存在する「オリジナルの」テキストとして、同時代の文化にいかにか介在するかという、その水平的なありようが問題となっている。翻訳者が同時代の文脈に合わせていかに原典を再造型したかがわかるパラテキストが注目を集めているのも、力点が移行したことの一つのあらわれだろう。ジョシュア・リードはこう指摘する。

かつての翻訳研究は翻訳者の過去に注目し、原典のpre-eminence (「前方に突き出たさま=卓越性」) を強調したが、それらの〔現在の〕研究は翻訳者の現在を強調し、翻訳そのものと、翻訳を形作るものでもあり翻訳によって形作られるものでもある文化について翻訳が何を明らかにするかに焦点を当てる (8)。

文脈への、この新たな関心を支えるためのデータベースもほぼ同時期に完成した。*Renaissance Cultural Crossroads*は、英語の書物が初めて印刷された一四七三年(注1)から内戦が始まった一六四〇年までのあいだに、イングランド、スコットランド、アイルランドにおいて印刷された翻訳作品(起点言語や目標言語は英語に限らずすべての言語を含む)、およびブリテン諸島の外で英語に、ないしは英語から翻訳され印刷された翻訳作品のオンライン目録である。この壮大なプロジェクトは、ウォリック大学ルネサンス研究センターを拠点として二〇〇七年に立ち上がり、二〇一一年にオンライン化され、二〇一三年にはそれを記念して、データの活用編とも言える同名の論文集が刊行された。

この目録は、STC (初期英語印刷文献簡略書名目録) 第二版およびESTC (一八〇一年以前の英語印刷文献簡略書名目録) にもとづいて作成されており、大まかなイメージとしてはEEBO (初期英語書籍集成データベース) から翻訳作品を抜き出してリストとしてまとめたものと考えることができる。これもまた、初めての試みである。ここにイギリス・ルネサンス期における翻訳文化の全貌が明らかにされ、さらに重要なことには、データベース化にともなう検索機能によって自由に掘り進み、新たな地勢図を描くことができるようになった。驚くべきはその鉅脈の巨大さと多彩さである。ルネサンス研究センターの紹介頁によれば、この目録が扱う一六七七年のあいだには、二一の言語、一〇〇〇人以上の翻訳者と約一二〇〇人の原著者が関与する六〇〇〇点をこえる翻訳作品が刊行されている。翻訳が、とりわけテューダー朝文化に重要な一角を占めていることは、つとに指摘されてきた。いまやその指摘がこのデータベースによって裏づけられ、翻訳が、文芸活動に限らず、言語、社会、政治のさまざまな領域において影響力を揮ったことが、まざまざと感知できるようになったのである。とともに、明らかにされたのは、RCCの編者が“international outlook” (xv) と言うところの、この時代の印刷出版文化の汎ヨーロッパ性である。そもそもルネサンスとは、ヨーロッパ全体を巻き込んだ一大文化運動である。とりわけ一六世紀後半には、宗教対立が大量のプロテスタント難民を生み出したことも相俟って、人、テキスト、概念がかつてない規模で移動し、文化交流のたえまない力学が作用していた。異種混濁的な循環を常態とするそのような時代にあって、イングランドを中心とするブリテン島のなかだけで初期近代文化を論じるのは、控え目に言って、もったいないことであろう。RCCの序文冒頭には、簡潔に、だが力強くこう記されている——「ルネサンスのブリテンは、さまざまな言語、文化、観念が遭遇する場であった。その時代の芝居や詩、書簡や日記、芸術や産業において、初期近代のブリテン諸島では、観念が取り交わされ交換されるなかですべての階層の人々が生活していたのである」(xv)。異文化が交差する翻訳作品は、それ自体が学際的な研究を促すものである。その意味で、このデータベースは、翻訳史や印刷・出版史に寄与するだけでなく、イギリス・ルネサンスの研究者に対して、ヨーロッパの視座が必要であることをより先鋭に訴えることになるだろう。

翻訳作品のシリーズ出版も進行中である。*MHRA Tudor and Stuart*

*Translations*は二〇一一年に刊行を開始し、二〇一七年までにジョージ・チャップマンのホメロス翻訳など一四冊を送り出した。ホームページによれば、「規範的な文庫」(3)を創出することが目的であり、先行シリーズの*Tudor Translations*とは「きわめて異なる範囲のテキスト」(3)を扱っているとされる。ここでふたたびわれわれは、イギリス・ルネサンス期の翻訳がいかに多様であるかを実感することになる。たとえば、マーガレット・タイラーが翻訳したスペイン語の騎士道ロマンスや、ウェールズ人であるハンフリー・ルウイドがラテン語で書いたブリテン島地誌の英訳、ガーヴィン・ダグラスが中期スコットランド語に翻訳した『アエネーイス』など、刊行されたテキストの幅広さからもそれはわかる。重訳も忘れられてはいない。リチャード・カルーが翻訳した『人間の機智の吟味』は、スペイン語原典のカミッロ・カミッリによるイタリア語訳を英訳したものである。まさに、正典のリストの見直しが進行しているのである。また、『イギリス・ルネサンスの翻訳理論』と題された第九巻には、翻訳観を知るうえでの重要なパラテキストが一冊にまとめられており重宝する(注2)。

以上、基本的なプロジェクトをいくつか紹介したが、ここで初期の研究史について触れておきたい。

興味深いことに、パウチャーは、イギリス・ルネサンス期の翻訳を概観するさい冒頭にこう述べた。ルネサンスは古典のテキストを再発見したが、イタリアやフランスでは、ギリシア語やラテン語で書かれた聖書や古典の原典が注解書といったかたちで原語のまま再現されたのに対して、イングランドではもっぱら翻訳によって再発見され「この種の一次資料的なものは・・ほぼ皆無であった」(45)、と。イングランドにおいて、*translatio studii*(学問の移転)は、文字通り、「移す」術である翻訳をつうじてなされていたのだ。翻訳が知の伝播に役立つという見解は、一二世紀ルネサンスを準備した大翻訳時代を思い起こすまでもなく、ルネサンスが知の移転の時期である以上、ごく当たり前の見解であり、さらには実践でもあった。一二世紀における主要な目標言語はラテン語であったが、一四世紀に始まったルネサンスにおいては近代諸語の勃興がいちじるしい。なかでも辺境の新興国イングランドは、大陸経由でもたらされる新しい学問の最大の輸入者であり貪欲な消費者であった。エリザベス朝の翻訳者たちはしばしば、前置きで、翻訳が国民

を教育するうえで有用であり、公益に資すると述べている。『宮廷人』を翻訳したトマス・ホビーは、ハンティンドン伯爵への献辞において、文化の後進性を翻訳の後進性と結び付け、大陸の他の国々では「外国語で書かれた機智ある書き物のみならず、ギリシア語やラテン語で書かれた哲学やあらゆる学芸にわたる書き物を母国語に翻訳する試み」(Rhodes 299)が盛んなのに、イングランドではそうではないと慨嘆し、以下のように語る——「わが国の学者たちの大半は、諸学芸を母国語に翻訳すると記憶力を損ない学問の妨げになるという見解をもっているが……真実をよく見れば、今日、諸学芸が自国語に最も盛んに翻訳されているところにこそ、学識に富む最良の人々が存在しているのである」(Rhodes 299)。あるいは知識を暗闇から光のなかへ解放するという、文字通り啓蒙の隠喩をもって有用性が主張されることもあった。キケロの『義務について』を翻訳したニコラス・グリマルドは、こう述べている——「もっぱらラテン語を知らない人々のために、私はこの古代ローマの作家を英訳し、かくも長いあいだ隠されていたものを、いまや光のなかにもたらし、古代の書き物のある意味でふたたび新しいものとし、わずかな者にしか用いられていなかった書物が多数の人々に普及するようにした。それによって、わが国の人々が、生活を整えるうえでこれがいかに素晴らしい宝であるかを理解し、これらの完璧な戒めによって助けられ導かれたとき、どの国の人々よりも礼節や学芸に向かう性向をもつがゆえに、品行の立派さにおいて比類ない国民になれるようにと」(Rhodes 252)。翻訳が、一部の教養あるエリート層だけではなく、古典語や他の近代諸語（とりわけフランス語とイタリア語）を読めない者に恩恵をもたらすというエリザベス朝の翻訳者たちの主張は、翻訳の一般的な機能をたんなる決まり文句として叙述しているわけではない。序文や献辞で繰り返される正当化の言説には、本体の翻訳作品が既成秩序に対して転覆的であるとみなされるのではないかという拭いきれない不安がひそんでいた（注3）。だが、ここにはまた、翻訳が *translatio studii* に中心的な役割を果たしていた時代に生きた人々の、知の媒介者としての自負心や使命感も感じ取ることができる。

翻訳者たちは、母国や母語の発展に資する、と前置きでしばしば主張していた。とすれば、翻訳者は、異国の財によって母国を富ませる国威発揚の貢献者ともなるわけである。一六世紀にイングランドが近代国家としての地歩を固めていくにつれて、道徳や作法の向上であれ、英語を豊かにすることで

あれ、公益の主張が愛国主義的な調子を帯びてくる。それをラディカルにつきつめていけば、以下のような一節に帰着することであろう——「生国と母国語を尊ぶ者は・・・・いかなる手段を尽くしても、かつて剣の刃によってこの島に対してなされた征服の報復として、イングランドのペンの歯によってローマ人の文学を制圧して彼らに勝利しようと努めない者がいるだろうか」(Rhodes 381)。これは、フィリーモン・ホランドがプリニウス翻訳（『世界の歴史、通常は博物誌と呼ばれている』というタイトルのもとで一六〇一年に出版された）に付した「読者へ寄せる序文」に由来する一節である。ホランドは、秘匿されていた知識を俗語による翻訳で万人に解放したと批判されることを想定し、反駁しているのである。ホランドのこのくだりは、ペンは剣よりも強しという概念が現代のわれわれにとって馴染み深いせいもあるのか、しばしば引用されるが、征服のイメージは、翻訳者の序文においてかならずしもありふれているわけではない。テオ・ヘルマンズは、この一節を含め、原典と翻訳がかくも完璧に主客転倒してしまうのは「きわめて異例」(110)であるとする。ヘルマンズはルネサンスの翻訳における原典と翻訳との関係を、パラテキストに出現するイメージのなかに探った（注4）。ヘルマンズの指摘によれば、そうしたイメージは、おもに主従や優劣の文脈において出現し、翻訳者の序文では、慣習的に、原典に対する翻訳の従属がニュアンスの差こそあれ謙譲の言辞をもって語られている。しかしながら、称讃詩においては、そうではない。たとえば、ジョシュア・シルヴェスターによるデュ・バルタス翻訳（一五九〇年に着手され一六〇六年に完成した『神の日々と御業』で、一七世紀初頭に評判を博していた）に寄せたエピグラムのかなかで、ベン・ジョンソンはこう歌っている。

バルタスは英語が己れのものであれと願う。
彼の創意がこのなかでかくもみごとに作用しているので、
彼の作品が翻訳であり、君の作品が原典であると、
いまや思われるほどなのだ。そしてフランスが誇ることは
もはやない。処女の栄光を喪ってしまったから。

翻訳作品に付されたエンコミウムや推奨詩は、当然ながら讚美することを目的としているので、主客逆転がしばしば見られる。さらにジョンソンのこ

のエピグラムには、フランスを女性化することによるジェンダー化された征服のイメージも現れている。ここにベンが言及されていれば、そのイメージの性的含意はより強められたことであろう。

序文においては例外的であるとされる征服のイメージに、われわれが違和感を覚えない理由には、二つの著作が関与している。一つは『ケンブリッジ・イギリス文学史』第四巻でチャールズ・ホイブリーが執筆した「翻訳者たち」のセクションである(注5)。これは初期近代イングランドの翻訳に関するほぼ最初期のアカデミックな叙述である。その冒頭の有名な一節を引用しよう。

エリザベス朝の翻訳者たちは、ドレイクやホーキンスを奮い立たせたのと同じ大胆な冒険精神をもって己れの業を探求した。彼らの野心は、思想と美の新世界を発見することであった。彼らは、どこであれ可能なところに知性の植民地を創ったり、われらの英語を話すよう骨折って教えこんだ雄弁な異国人を母国の岸辺に連れ帰ったりするために、知識の広大な海原を航海したのだ(1)。

北西航路の探求や新大陸の植民地化で人々の知的・物質的欲望が拡大していた時代に、いかにもふさわしいと思われるアナロジーがここにはある。翻訳者は航海者であり、勇猛果敢な精神をもって発見の旅に出て、異国の知という財をもたらし故国を潤す。それと同じレトリックが、ホイブリーに靈感を得て書かれたもう一つの書物、すなわち、F・O・マシーセンの『翻訳——エリザベス朝の技法』にも用いられている(注6)。冒頭の忘れ難い一節を引用しよう。

翻訳者の仕事は愛国主義の業である。彼もまた、航海者や商人と同様、母国に何らかの善をなすことができたのである。イングランドの運命にとって、異国の書物は船乗りの発見とまさしく同じくらい重要であると彼は信じ、それらの書物を征服のすべての熱狂をもって母語にもたらしえてきたのである(3)。

ホイブリーもマシーセンも、シェイクスピア時代における定型的な翻訳者

像を創るのに、決定的な役割を果たした。そのイメージは長い生命を保ったが、そこには二つの理由がある。第一に、発見や征服のレトリックが、海洋帝国としての第一歩をふみだしたエリザベス一世下のイングランドにいかにもふさわしいと感じさせたからであろう。二人にとって、エリザベス朝翻訳の特質は闊達さや活力であった。それはシェイクスピアの言語を形成し、やがては欽定訳聖書の散文へと結実するものであった。

第二に、より現実的な理由がある。二〇世紀後半に、翻訳研究は空白の時代を迎えるのだ。マシーセン以降、次なる実質的な研究書は、二〇〇六年まで待たねばならなかった。すなわち、マッシミリアーノ・モリーニの『テューダー朝翻訳の理論と実践』が現れ、二一世紀初頭に翻訳への関心が熱く甦っていることを証しするまで、七〇年以上にわたってマシーセンの書物が君臨してきたのである。OHLTEの監修者が序言において述べているように——「英文学の物語は幾度も語られてきたが、英文学の翻訳の物語があますことなく語られたことは一度もない」(vii)。

ここでふたたび研究史を振り返ってみると、そもそもの起点として、一九世紀末から二〇世紀はじめに、マシーセンの翻訳観や正典形成に影響を与えた注目すべき山があった。*Tudor Translations*というシリーズ名のもと、二期にわたってテューダー朝イングランドにおける代表的な翻訳作品が復刻されたのである。第一期は、W・E・ヘンリの監修のもと、一八九二年から一九〇九年にかけて四四巻が刊行された。第二期は、ホイブリーの監修のもと、一九二四年から一九二七年にかけて一二巻が刊行された(注7)。これらのシリーズは欄外注も含め原本を忠実に再現しており、かならずしも一般読者にとって読みやすいものではなかった(注8)。実用のためではなく書籍収集家向けのものであったが、教養層がアカデミックな興味のために、あるいは楽しみのために読むこともできただろう。とりわけ、第一期のシリーズが開始されたのは大英帝国の時代である。海洋帝国としての基礎を築き力強い言語を生み出したエリザベス朝の文芸にヴィクトリア朝人が関心を寄せるのは不思議ではないし、シェイクスピアが崇拜され文化的優越性のアイコンとして植民地統治に利用された時代において、翻訳作品の言語は何よりもまず、詩聖の言語を木霊させていたのである。しかしながら、これら二つのシリーズからマシーセンへといたる翻訳研究の系譜は、第二次世界大戦以降、長い停滞の時期を迎えることになる。

ホイブリーやマシーセンを起点とする、伝統的な批評の態度とは次のようなものであろう。マシーセンは、韻文の翻訳は「韻律の壁」(5)があるため技術的に困難であり、原典や散文翻訳よりも劣った作品しか生み出せていないとして、散文翻訳のみを扱った。おそらくはシェイクスピアの言語が念頭にあったのだろう、彼はエリザベス朝の散文に、時代精神と呼応する国民感情にいろどられた演劇精神を看取った。マシーセンは、カスティリオーネとモンテーニュも扱ったが、翻訳が学芸復興の手段であるという冒頭の宣言に従えば、おそらくは、俗語で書いた同時代の作家よりも古典作家を重視していたと思われる。また、ルネサンスに特有の、原典とのあいだに他言語——国際言語であるラテン語やフランス語が多かった——を介在させる重訳は軽視されていた。このような態度の問題点は、何よりもまず、主題や時代や起点言語などによって翻訳の正典を限定することによって、シェイクスピア時代の翻訳の多様性を見えなくしてしまうことにある。

二〇世紀最後の四半世紀は、批評理論が席卷し、批評の関心が文化へと移行するなか、文学以外の実に多様なテキストが脚光を浴びたが、翻訳テキストはなおも置き去りにされたままであった。批評の「文化論的転回」が、いまわれわれが目撃しつつある翻訳文化論をなぜあの時に生み出さなかったかということは、考えてみれば不思議である。シュリンクは研究史におけるこの不毛期がいかに生じたかについて、いくつかの要因をあげている (2-4)。初期近代という概念がルネサンスという概念に取って代わることによって、学芸復興から想起される翻訳の重要性が見えにくくなったこと。新歴史主義は文学と文学以外のテキストの結び付きを重視することによって、ポストコロニアル批評はイングランドと新大陸 (旧大陸) との文化的遭遇を重視することによって、翻訳研究を影に追いやったこと。第二次世界大戦以降、英語が支配的な言語になることによって、多言語文化において翻訳が果たしていた役割が認知されにくくなり、さらには、これはきわめて現実的な理由であるが、英語圏においてモノリンガル化が進行し外国語を知る者が減少したこと、などである。いずれもきわめて納得のいく要因であると思われる。そのいっぽうで、翻訳学は七〇年代後半に独自のディシプリンとして歩み始め、ポストコロニアル批評との親和性の高さもあって、いまや現代の文化批評の強力なパラダイムとなっている。しかしながら、現代の翻訳理論は、かならずしも初期近代のテキストにとって親和性のあるものではない (OHLTEの

中世や初期近代の巻において現代の翻訳理論への直接的な言及はほとんど見られない)。シュリンクは、それについて短いながら注意深いコメントを述べている。翻訳が産出される言語的、政治的、物質的な文脈に注目したこと、翻訳作品を二次的な派生物ではなく独立した書き物であるとしたこと、は翻訳学の成果であるが、現代の翻訳学は、翻訳の理論と実践あるいは翻訳史などに特化することによって、翻訳を文学や文化の歴史というより広範な文脈から切り離しゲッター化する傾向にあるので用心すべきだ、と言うのである(4)。イギリス・ルネサンス期は、翻訳がたゆみない文化交流と文化伝達の隠喩とも実践ともなっていた時代である。だからこそ、翻訳はさまざまな文化領域との関連において理解されねばならないのだ。翻訳が同時代の言語文化によってまさしくいかに形成され、いかに形成する力となっているかを考察すること——研究史における今日の翻訳の復権は、翻訳を初期近代イングランドの言語文化の中心に復活させることを意味している。

いま、研究の潮目は、明らかに変わった。二一世紀中葉に向けていかなる成果が期待できるにせよ、確実に言えるのは、翻訳研究が文学史の見直しに留まらず、イギリス・ルネサンス期についてのわれわれの理解を拓げ、その像を転換させる力をもつことである。

注

¹ 英語で書かれ印刷された最初の書物は*The Recuyell of the Historyes of Troye*で、翻訳書であった。それは、トロイア戦争をめぐるエピソードを集成しロマンス風に語ったもので、ラウル・ルフェーヴルがフランス語で書いた原著をウィリアム・キャクストンが英訳し、ブルージュ（ヘントという説もある）で印刷した。キャクストンはその後帰国し、一四七六年にウェストミンスターに工房を開いて、イングランドに印刷術をもたらすことになる。

² イタリアやフランスではしきりに翻訳理論が論じられていたが、イングランドではまとまった議論は知られていない。例外が、ローレンス・ハンフリーが翻訳の実践と理論についてラテン語で書いた『諸言語の解釈』（パーゼルで一五五九年に出版された）である。迫害を逃れスイスに亡命していたプロテスタント学者であるハンフリーは、イングランドの知的生活を向上さ

せるべく翻訳の有用性を主張した。しかしながら、再版はされず、英訳もされず（翌年に出版された支度層教化に関する論考は英訳された）、この唯一の翻訳理論書が広く読まれたとは思えない。だからこそ、翻訳者の声が聴けるパラテキストが重要になるのである。

³ 俗語への翻訳という、いわば知の民主化は、学問は秘められた奥義に通じるごく一部の人々のものであるという見解への挑戦であり、翻訳が促す新思想の拡大は、中世的な社会秩序に対する脅威となった。翻訳の批判者たちの拠点となったのが、アリストテレス主義を奉じる諸大学であり、その敵対的な雰囲気は、翻訳とは直接関わりはないが『聖灰水曜日の晩餐』の第一対話に描かれている、ジョルダノ・ブルーノとオックスフォードの博士たちのコペルニクス理論をめぐる論争的一幕に窺うことができる。また、異教の書き物である古典を翻訳することは信仰をゆるがすという批判は根深く、同時代のイタリア語著作の翻訳についても——アスカムがイングランド人を墮落させる「キルケーの魔法」と難じたことは有名であるが——、一六世紀末にはピューリタンたちが不道德であると攻撃した。また、聖書の英語翻訳は、擾乱の火種となる危険をつねに帯び、宗教改革以降の宗教的・政治的緊張のなかで細心の配慮を必要としたことは言うまでもない。このように、聖俗いずれの書き物においても、翻訳者たちは、みずからのなした業が政治的に不穏当であるとみなされるのではないか、という不安を抱えていた。しかしながら、とりわけ九〇年代にさしかかる頃には、国民意識の高揚とともに英語に対する高まりゆく自信のなかで仕事をしていたことも、またたしかである。翻訳の擁護や翻訳者の自己弁護は、公益のためという慣習的なレトリックを用いるにしても、出版時期や扱われている題材によって、その動機や目的は異なるだろう。近年は翻訳書のパラテキストが研究対象として注目されており、精緻な歴史化がなされることが期待できる。

⁴ ヘルマンズは、慣習的に出現するイメージをイングランドとフランスのパラテキストのなかに辿っていき、一六世紀後半からドライデンの時代にあたるまでの翻訳観の変遷を記述している。そうしたイメージや隠喩には、翻訳をめぐる問題関心が結晶しているが、なかでも原典との関係は、翻訳者が己れの労働の所産を考察し評価するうえで重要であり、さまざまなイメージを用いて語られている。たとえば、衣服（借り着）、光と影、足跡を辿る、消化のイメージなどである。原典に対する翻訳の隷属から対等な友人関係ま

で振幅はあるが、権力関係という枠組のなかでそうしたイメージが発想されていることはたしかである。ホランドの、翻訳による征服というイメージも、その極端な例である。翻訳が原典との関係概念によって捉えられ、あるいは二次的な派生物とみなされるかぎり、どうしても主従や優劣の感覚はつきまとう。ヘルマンスによれば、一七世紀半ばに魂や詩想の類縁性といった共感性のイメージが出現するようになってようやく、翻訳者たちは伝統的な二項対立的なレトリックから決別して、詩的創造性を強調する模倣（パラフレーズ）へと舵を切った、とされる。

⁵ われわれにとってより馴染み深いのは、二〇世紀初頭に完結したこの壮大なイギリス文学史ではなく、ジョージ・サン普森によって簡略化され、日本語にも翻訳（一九七〇年の第三版を底本とする）された、『簡約ケンブリッジ・イギリス文学史』だろう。ホイプリーの叙述が誠実に踏襲されており、やはり冒頭が印象的なので、ここに引用する——「エリザベス朝の翻訳者は、ドレイクやホーキンを鼓舞したのと同じ勇敢な冒険精神で仕事に専念した。フィリーモン・ホランドは正当にも自分の仕事を一つの征服事業であると述べ、それが故国に益をもたらすことを願っていた」（256）。

⁶ 翻訳といえばエリザベス朝を想起させるかもしれない。文芸黄金期であり、シェイクスピアの材源として名高いオウィディウス、プルタルコス、モンテーニュの翻訳がなされた時代でもあり、さらには、マシーセンの *Translation: An Elizabethan Art* という書名を思い起こすからである。「エリザベス朝翻訳を研究することは、ルネサンスがイングランドに到来した手段を研究することである」（3）という、しばしば引用される冒頭のマニフェストとともに記憶されるこの研究書は、翻訳研究におけるここ一〇年のパラダイム・シフトによって、批判的に言及されることが多い。OHLTEの第二巻を編集したブレイドンは、初期近代をつうじて翻訳の営みはずっと続いてきたのだから、そもそも時代をエリザベス朝に限定すること自体が誤解を招くものであるとする（3）。しかしながら、エリザベス朝はまぎれもない翻訳最盛期であり、聖書を除く世俗的な著作について、トマス・ホビー、トマス・ノース、フィリーモン・ホランド、ジョン・ハリングトン、ジョージ・チャップマン、ジョン・フローリオなど影響力のある翻訳者を輩出した時代であった。それだけではない。翻訳という文化横断的な営為は、一つの言語を他の言語に置き換える作業のなかで、異質な言語と向かい合うことによって、

他者構築と主体形成という異文化接触にともなう運動を作動させる。文化と言語の後進性を意識し、自己造型を模索していた初期近代のこの新興の国家において、翻訳は、何よりもまず、形成する力として作用していた。そして、一六世紀後半のイングランドこそが、翻訳が驚くべき量と創造性をもって産出され、文化と言語のアイデンティティを彫琢するうえで深甚なる力を揮っていた、翻訳爆発の時代であることは明らかである。それゆえ、マシーセンが「エリザベス朝」としたのは、それが最も重要な時代であるという意味においては正しい。

⁷ シリーズ中の一冊として刊行された『セネカによる十の悲劇』（1927年）への序文は、T・S・エリオットによって書かれている。エリオットは同年にセネカをめぐる評論をさらに二本書いている。ちなみに、エリオットのセネカへの興味は、シェイクスピアの材源としての副次的なものであったと考えることもできるし、後年彼が書くことになる詩劇の形を模索していたのだとも考えられる。

⁸ イギリス・ルネサンス期の翻訳作品のシリーズとしては *Tudor Translations* と *MHRA Tudor and Stuart Translations* の二つしかない。MHRA版が *Tudor Translations* のテキストと明らかに異なっている点は、スペリングや句読点が多角化されていることである。MHRA版は印刷史や書物史の専門家にとっては必要にして十分ではないかもしれないが、解説や語彙集も充実しており、このシリーズが対象とする研究者や学生にとっては利用しやすい。原本はEEBOで確認することができるので、実用性や読みやすさが優先されたのだろう。

本稿で言及された文献

Barker, S.K., and Brenda M. Hosington, editors. *Renaissance Cultural Crossroads : Translation, Print and Culture in Britain, 1473-1640*. Brill, 2013.

Hosington, Brenda, et al., editors. *Renaissance Cultural Crossroads : An Analytical and Annotated Catalogue of Translations, 1473-1640*. www.hrionline.ac.uk/rcc/index.php.

- Hadfield, Andrew, and Neil Rhodes, general editors. *MHRA Tudor and Stuart Translations*. Modern Humanities Research Association, 2011-.
- Morini, Massimiliano. *Tudor Translation in Theory and Practice*. Routledge, 2006.

引用文献

- サンブソン, ジョージ『ケンブリッジ版イギリス文学史 I』平井正徳監訳
研究社、1976年。
- Barker, S.K., and Brenda M. Hosington. Introduction. *Renaissance Cultural Crossroads : Translation, Print and Culture in Britain, 1473-1640*, edited by S.K. Barker and Brenda M. Hosington, Brill, 2013, pp.xv-xxix.
- Boutcher, Warren. "The Renaissance." *The Oxford Guide to Literature in English Translation*, edited by Peter France, Oxford UP, 2000, pp.45-55.
- Braden, Gordon. "An Overview." *The Oxford History of Literary Translation in English*, edited by Gordon Braden et al., vol.2, Oxford UP, 2010, p.3.
- France, Peter, and Stuart Gillespie. General Editors' Foreword. *The Oxford History of Literary Translation in English*, edited by Roger Ellis, vol.1, Oxford UP, 2008, p.vii.
- Hermans, Theo. "Images of Translation: Metaphors and Imagery in the Renaissance Discourse on Translation." *The Manipulation of Literature : Studies in Literary Translation*, edited by Theo Hermans, Croom Helm, 1985, pp.103-35.
- Jonson, Ben. "epigram 132." *Ben Jonson : The Poems and the Prose Works*, edited by C.H. Herford and Percy & Evelyn Simpson, Oxford at the Clarendon Press, 1954, p.82.
- Matthiessen, F.O. *Translation : An Elizabethan Art*. Harvard UP, 1931.

- MHRA *Tudor and Stuart Translations*. www.mhra.org.uk/series/TST.
- Reid, Joshua. "The Enchantments of Circe : Translation Studies and the English Renaissance." *The Spenser Review*, vol.44, spring-summer 2014, www.english.cam.ac.uk/spenseronline/review/volume-44/441/translation-studies/translation-studies-and-the-english-renaissance/.
- Rhodes, Neil, et al., editors. *English Renaissance Translation Theory*. Modern Humanities Research Association, 2013.
- Schurink, Fred. Introduction. *Tudor Translation*, edited by Fred Schurink, Palgrave Macmillan, 2011, pp.1-17.
- Whibley, Charles. "Translators." *The Cambridge History of English Literature*, edited by A.W. Ward and A.R. Waller, vol.4, Cambridge UP, 1909, pp.1-25.